幼小の連携を見据えた生活科についての一考察
～評価の継続性をめざして～

学校教育専攻
幼年発達支援コース　　指導教員　佐々木　宏子
下　山　敬　子

1　問題の所在

生活科が生まれてからのこの 10 年余りの間に，生活科は従来の教育観に大きな変革をもたらした。そして，「幼稚園教育－生活科－総合的な学習の時間」という幼稚園から高等学校までの長い縦のカリキュラムが今，構築されようとしている。幼稚園教育で育まれた力が，総合的な学習の時間に花開くためには，この２つの間に位置する生活科の役割がきわめて重要となる。しかし，小学校教師が幼稚園教育の理念を十分に理解し，幼稚園の学びを受け継いだ生活科の授業を計画し展開しているかというと，反省すべき点もあるのではないだろうか。そこには，幼小連携の視点から生活科を見つめ直し，子どもの姿から子どもの学びを広く深く見取る教師の目が問われているのであると考える。

2　研究の目的と方法

1）研究の目的

本研究では，幼稚園と小学校生活科における子どもたちの学びを観察し，幼稚園教育における遊びの視点から小学校教育における学びを見つめ直す。特に，生活科において，子どもがどのようにして関係性を構築しながら成長していくのかを見取り，生活科のあり方について考察する。そして，幼稚園における子ども理解を受け継いだ評価を生活科においても行うことにより，幼小連携への手がかりを探っていく。

2）研究の方法

徳島県Ｘ幼稚園・Ｙ小学校において子どもたちの生活や学習を観察し事例を収集した。観察期間は，平成 16 年 7 月より平成 17 年 10 月までである。観察時にデジタルカメラ，ビデオカメラ，ボイスレコーダーを用いて記録し，それらを参考に子どもたちの様子を文章化した。そして，「人間を理解し関係を調整する力」（鳴門教育大学附属幼稚園）を用いて子どもたちの学びを分析し，考察した。

3　今，求められている学力と生活科

1）学力とは何か

学力低下論争や PISA2003 および TIMSS2003 の結果報告から，学力とは何かについて社会全体が共通理解をし，教育を進める必要性があることが明らかになってきた。今，子どもたちに必要な学力とは，他者とのかかわり合いを大切にすることを通して獲得される「生きる力」である。教師は，そのような「学びの場」を提供する支援者であり続けることが求められている。

2）幼稚園教育から小学校教育へ

幼小連携の重要性は広く理解されているが，何を連携するのか，連携しているものは何かについては，まだ十分に理解されているとはいえない。そこで，「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」との比較や，「幼稚園幼児指導要録」と「小学校児童指導要録」との比較により，幼小の連続性を確認した。

3）幼稚園教育と生活科をつなぐ

幼稚園教育の評価と生活科の評価の継続性に

ついては，今まであまり論じられてこなかった。そこで，「人間を理解し関係を調整する力」を用いて，生活科における子どもたちの姿を「人間関係」という視点から見取り，分析することにした。これにより，幼稚園教育における評価と生活科の評価との間に継続性が生まれるのではないかと考えた。

4　幼稚園教育における子ども評価から生活科の評価へ

1）子どもの人間関係の築き方に着目する

子どもたちは複雑な関係性の中で生活している。トラブルを通して，あるいは異年齢児との交流を通して築く関係性もある。また，他者とは異なる行動をとる子どもが，相手の思いに寄り添いながら豊かな人間関係を展開している場合もある。

2）幼小の段差と教師の役割を考える

教師は子どもの様子を観察しながら，一人ひとりを大切にした柔軟で適切な支援を行う。しかし，教育方法の違いから，小学校では，すべての子どもの心に寄り添った適切な支援をしていくのは難しい。ここに幼小の段差の一原因があると考える。そこで，入学まもない頃の子どもへの支援策を，幼稚園教育を参考に講じてみた。

3）子どもの生活の中から科学的思考への芽生えを見いだす

子どもの遊びや生活の中には，科学的思考への芽生えと考えられる言葉や行為がたくさん見られる。それらを丁寧に見取り，子どもに問い返していくことによって，科学的思考へと高まっていくと考える。

4）学びのみちすじをたどる

学習目標に到達するまでの子どもの学習過程は多様である。その過程を丁寧に見取った上で評価規準に照らして評価することが，子ども一人ひとりを大切にすることにつながる。

5）幼稚園教育から生活科へ，生活科から教科・総合的な学習へ

２年間の生活科学習の中で，子どもは関係性を築きながら知識や学び方，思考力や判断力を身に付けている。幼稚園教育から生活科，総合的な学習にいたる長いスパンで子どもを見つめ育てていくことが大切である。

5　研究の結果と今後の課題

1）研究の結果

一人ひとりの子どもの姿を丁寧に見取り考察することを通して，子どもとは何か，子どものよさとは何かを実感し，子どもを見つめ続ける本当の楽しさを得ることができたと感じている。また，「人間を理解し関係を調整する力」を用いて子どもの学びを分析することにより，評価の裏付けが明確になり，子どもの学びの多様性を一層浮き彫りにすることができた。

2）今後の課題

人格を持った一人の人間として子どもを評価しなければ，評価の意味がなくなってしまう。したがって，「子どもの学び」を評価する生活科においては，評価規準の設定の仕方やその運用の仕方を研究していく必要がある。さらに，目の前の子どもたちの学びを見取り，その場で適切に評価し，それを子どもに返していけるように，教師としての力量を向上させることが課題である。

3）おわりに

本研究を通して，子どものありのままの姿を見つめ，「学び」とは何なのかを考え直す貴重な機会を得た。ここでもらったエネルギーを糧に，子どもたちが夢中になって活動できるような環境を整え，そこで彼らの心に寄り添いながら豊かな学びを見いだし，ともに歩んでいきたいと思う。